

# Tattvasamgraha, Bahirarthaparikṣā にあ られる形象虚偽論について

—Sarvajña と cittāntara—

栗原尚道

はじめに

シャーンタラクシタ (Sāntarakṣita, 725-788) の *Tattvasamgraha* (TS) とカマラシーラ (Kamalaśīla, 740-795) による註釈 *Tattvasamgrahapañjikā* (TSP) は、仏教、非仏教の立場からの多くの反論 (pūrvapakṣa) とそれに対する応答 (uttarapakṣa) の形をとって、二人の哲学的立場を明らかにする。そこにあらわれる反論には、著者が独自に構想したものと、それ以外に、実際に反論者の存在が特定できるものとの二種があるろうが、テキストに反論者の名が挙げられていなくても、あらゆる反論には、その具体的な反論者が含意されているのではないかという前提にひとまず立ってみる必要がある。そして、文献学的に、その反論者できるだけ特定していくことが、我々のなすべき課題であると考えられる。

さて、唯識派の立場から外界の対象を考察する Bahirarthaparikṣā 章は、約120偈から成り、そのうち前半の約40偈で、外界実在論者の主張する原子 (paramāṇu) の存在を否定し、後半の約80偈では、対象とその知が「必ず同時に認識されること」(sahopalambhaniyama) に対する様々な批判をことごとく退けることによって対象が知識の外には存在しえないことを証明して、いわば二通りに、「表象のみであること」(vijñaptimātratā) を証明する。この章における主たる反論者は、ミーマンサー (Mīmāṃsā) 学派のクマーリラ (Kumārila, 7世紀前半) と、その主張が説一切有部 (Sarvāstivādin) のものとも経量部 (Sautrāntika) のものとも解釈される論師シュバグプタ (Śubhagupta, 700頃) である<sup>1)</sup>。本論では、この章の後半にあらわれる一つの議論を紹介し、ここでの反論者を特定することを試みたい。その議論とは、一切智者 (sarvajña), すなわち仏陀が、他人の心 (santānāntara) を認識の対象とするか否かという問題である。この部分には、太田心海氏、一郷正道氏の御研究があるが<sup>2)</sup>、それらを踏まえた上で別の視点から考察してみたいと思う。

## 本論

まず、TSP における議論の流れを紹介しよう。唯識性を証明するために、「青とその知は異ならない、必ず同時に認識されるから」というダルマキールティ (Dharmakīrti, 600-660) の有名な推論式が呈示され<sup>3)</sup>、それに対して、様々な論難が提起され、それらがすべて否定されていく。そこで、「仏陀の認識 (vijñāna) についても、『有形象 (sākāra) か、無形象 (nirākāra) か、また、同時に、別時に生じるか』という懸念が起こらないことがあるか。」(BASK 95)<sup>4)</sup> というシュバグプタの偈が反論として引用され、カマラシーラはこれを散文の形で次のように説明する。

「有形象等の認識による対象 (artha) の把握 (grahaṇa) は理に合わない」という懸念が起こると同様に、仏陀の認識による対象の把握についても、[懸念が] 起こらないことがあろうか<sup>5)</sup>。

この反論に対する答えとして、シャーンタラクシタは、

有形象でも、無形象でも、[仏陀の認識は] 他のものの認識の主体 (vedaka) ではない。故に、仏陀の認識についても懸念は起こらない<sup>6)</sup>。

と述べ、カマラシーラは、

世尊の智 (jñāna) は、これ (仏陀の智) について [対論者のような] 懸念を起こすような、それ (対象) の認識の主体と認められない。彼 (仏陀) にとって、すべての障害 (āvaraṇa) は取り払われているから、所取 (grāhya)・能取 (grāhaka) という分別 (vikalpa) はないと認められる<sup>7)</sup>。

と説明する。

次に、問題となる反論があらわれる。

しかし、外界の対象は所取でなくとも、他の心相続 (santānāntara) に存在する他の心 (cittāntara) は確かに存在する。それは、世尊の智にとって、どうして所取でないことがあろうか<sup>8)</sup>。

この反論について、シャーンタラクシタは、次のように答える。

認識論者の見解では<sup>9)</sup>、他 [人の] 食欲 (rāga) 等の認識 [が生じる] 場合、それ (食欲等の認識) は相似性 (sārūpya) から生じるのであるから、[仏陀に] 障害が存在することになってしまう<sup>10)</sup>。

カマラシーラはこれを註釈して、次のように述べる。

もし、他の心相続に存在する食欲等の認識があるならば、相似性によってのみ、理にか

*Tattvasaṅgraha*, *Bahirarthaparikṣā* にあらわれる形象虚偽論について (栗原) (193)

なうであろう。故に、もし、その相似性が全体的に、であれば、仏陀の智も貪欲をもつことになってしまう。その場合、煩惱障 (*kleśāvaraṇa*) が取り払われていないことになり、障害が存在することになってしまう。また、その相似性が部分的に、であれば、二つの側面 (*ākāra*)<sup>11)</sup> が取り払われていないので、所知障 (*jñeyāvaraṇa*) が存在することになってしまう。所取の側面がついているからである<sup>12)</sup>。

その後、第三の反論として「もし仏陀が何も認識しないならば、どうして一切智者であるといえるのか」という疑問が提起されるのであるが<sup>13)</sup>、「残らず、世間の利益を満たすから、認識 (*darśana*) をもたなくても、一切智者と呼ばれる」<sup>14)</sup>とカマラシーラは答えている。

この議論にあらわれる三つの反論のうち、第一のものは、シュバグプタの *Bāhyārthasiddhikārikā* の第95偈にあたる。そして第三のものは、同じく第86偈 e に対応する<sup>15)</sup>。その偈の abcd 句はすでに、TSP の、ここに先立つ *sahopalambhaniyama* の論争の中で、この証因 (*hetu*) が不定 (*anaikāntika*) であるという彼の反論の論拠として<sup>16)</sup>、次のような散文の形であらわれている。

例えば、仏陀至尊の認識の対象 (*vijñeya*) である他人の心 (*santānāntaracitta*) と仏陀の智は必ず同時に認識されるけれども別である。(中略) 故に証因は不定である<sup>17)</sup>。

カマラシーラは、これを

仏陀の心は他人の心に存在する心刹那を知るのではない。仏陀は、あらゆる障害が払いのけられているので、能取、所取という汚れ (*kalāṅka*) が除かれているから<sup>18)</sup>。

と、否定している。

では、なぜ、「仏陀が他人の心を認識する」という説が二回も反論としてあらわれ、否定されたのであろうか、しかも、最初の反論の際に、シュバグプタは *kila* という語を用いている。この反論が100%シュバグプタのものであるとはいえない可能性が指摘されよう。すなわち、仏陀の智が他人の心を認識するか否か、という論争が、シャーンタラクスタ、カマラシーラの時代以前にすでに存在していたのではないかと考えられる。その議論とは、一方は、仏陀が他人の心を認識すると主張し、他方では、TS 2048 の通り、仏陀が障害を持つことになってしまうので不合理であると否定するものである。

そこで、ほぼ同時代の別の資料を紹介しよう。それは、ヴィニータデーヴァ (*Vinītadeva*, 700頃) の *Santānāntarasiddhīkā* および、カンバラ (*Kambala*, 7世紀以降) の *Ālokamālā* (*ĀM*) と、アスヴァバーヴァ (*Asvabhāva*, 7世紀以降) による註釈 *Ālokamālāṭīkā* (*ĀMṬ*) である。

(194) *Tattvasaṃgraha*, Bahirarthaparīkṣā にあらわれる形象虚偽論について (栗原)

ヴィニータデーヴァは、仏陀の智について

仏陀の領域 (viśaya) は不可思議 (acintya) であり、彼らが他の心をお知りになることが不可思議であるのみならず、区別なく、一切の対象、一切の形をお知りになることも不可思議である<sup>19)</sup>。

と主張し、さらに、

出世間智 (lokottarajñāna) の後に得られる妙観察智 (pratyavekṣaṇajñāna) は、所取と能取という分別を持っているから、微細な実体、覆われているもの、遠く隔たったもの (viprakṛṣṭa)<sup>20)</sup> すべて、一切の形をお知りになる方 (仏陀) は、世間のあらゆる形をお知りになる<sup>21)</sup>。

と述べる。仏陀が他の心を認識することは否定されず、「不可思議」ということにより、間接的に可能性が示唆されていることがヴィニータデーヴァについてうかがえる。

一方、カンバラとアスヴァバーヴァの場合、

もし表象 (vijñapti) も [別の] 表象の対象でないことが認められない場合には、それ (表象) を瞑想すること (tatsamādhānam) は必ず粗大性に至る<sup>22)</sup>

以上のように、物質 (rūpa) 等の外界のものを否定して、他の表象も対象という実体であることを否定しようとして、[カンバラ先生は]「表象も表象の…」といて、表象も別の表象の対象でなく、[言い換えて] 領域 (viśaya) ではない<sup>23)</sup>。

と言っているので、両者にとって、他人の心が所取となることは明らかに否定されている。

さて、ヴィニータデーヴァとカンバラは共に、後代のチベット宗義書において、形象虚偽論者 (rNam rdzun pa) として分類されているが、ヴィニータデーヴァは有垢派 (Dri bcas pa)、カンバラは無垢派 (Dri med pa) とされている。有垢派、無垢派の区別される基準は、仏陀の智において、形象があらわれるか否かという点であった<sup>24)</sup>。この両派に直接的な論争があったかどうかという点については、これまで文献学的に跡づけられたことはないが、本論文で紹介した TS のこの箇所が、有垢派と無垢派に論争があったことを間接的に証明するのではないか、つまり、シャーンタラクンタとカマラシーラが、無垢派の立場から、他人の心が仏陀の智にとって所取となるという有垢派の主張を否定しているのではないかということが、一応の作業仮説として成り立つであろう。

年代論の点でも、ヴィニータデーヴァは700年頃とされており、カンバラとアスヴァバーヴァも、シャーンタラクンタ、カマラシーラより後とは考えにくいこ

*Tattvasaṃgraha*, Bahirarthaparikṣā にあられる形象虚偽論について (栗原) (195)

とを考慮すると<sup>25)</sup>、有垢派たるヴィニータデーヴァと、無垢派たるカンバラ、アスヴァバーヴァとの間に論争があったと考えてよいのではなかろうか。

## 今後の課題

この、一切智者が他人の心を認識するか否かという問題が、一連の、他人の心の存在をめぐる論争、一切智者の存在論証の中にどのように位置付けられるかが今後検証されるべきであろう。シュバグプタには *Sarvajñasiddhi* という短いテキストがあるが、他人の心に関する議論はあられない<sup>26)</sup>。また、TS 第26章は一切智者の存在論証を扱っているが、ここにもあられないようである<sup>27)</sup>。また、後代のラトナキールティ (Ratnakīrti, 1000-1050) の *Santānāntaradūṣaṇa* にも<sup>28)</sup>、ジターリ (Jitāri, 10世紀後半-11世紀初頭) の *Sarvajñasiddhi* にも出てこない<sup>29)</sup>。他人の心をめぐる論争、一切智者の存在論証の二つはともに後期仏教認識論・論理学上の重要なテーマであり、さらに広い視点から検証していく必要があると思われる。

---

テキスト

AM *Ālokamālā* by Kambala. (Skt. & Tib. ed. Lindtner Chr.)

“A Treatise on Buddhist Idealism” *Indiske Studier* 5, Copenhagen, 1985, pp.108-221.

AMT *Ālokamālāṭīkā* by Asvabhāva. (Tib.) D (3894) ha 62a4-108b7, P [146] (5869) no 357a5-419a3.

TS *Tattvasaṃgraha* by Śāntarakṣita.

(Skt. ed. Shastri D.) *Tattvasaṅgraha of Ācārya Shāntarakṣita with the Commentary ‘Pañjikā’ of Shri Kamalashīla*, 2 vols., Varanasi, 1968.

(Skt. ed. Krishanamacarya E.) *Tattvasaṅgraha of Śāntarakṣita with the commentary of Kamalāśīla*, 2 vols., Baroda, 1926.

TSP *Tattvasaṃgrahapañjikā* by Kamalāśīla. (See TS)

BASK *Bāhyārthasiddhikārikā* by Śubhagupta. (Tib. ed. Shastri N.A.)

“Bāhyārthasiddhikārikā”, *Bulletin of Tibetology* vol. 4 no. 2, pp.1-96.

SS *Santānāntarasiddhi* by Dharmakīrti. (Tib. yd. Stcherbatsky Th.)

*Santānāntarasiddhi of Dharmakīrti*, Bibliotheca Buddhica 19, Petrograd, 1916.

SST *Santānāntarasiddhiṭīkā* by Vinitadeva. (See SS)

1) 一郷正道, 「シュバグプタとシャーンタラクスタ」『中観莊嚴論の研究』, 京都, 1985.

2) 太田心海, 「認識の対象に関する考察, *Tattvasaṃgraha*, Bahirarthaparikṣā の和訳研究 (下)」, 『佐賀龍谷学会紀要』17, 1969, pp.26-44 及び一郷掲書。

- (196) *Tattvasaṃgraha*, Bahirarthaparīkṣā にあらわれる形象虚偽論について (栗原)
- 3) *Pramāṇaviniścaya*, Pratyakṣa 55ab (Tib. Vetter, T. ed.) p.94, n. 4: sahopalambhaniyamād abhedo nilataddhiyoḥ.
  - 4) BASK95: sākāraṃ tan nirākāraṃ tulyakālam atulyajam/ iti buddhe 'pi vijñāne kiṃ na cintā pravarttate//
  - 5) TSP 699.6-7: yathā sākārādivijñānena nārthasya grahaṇaṃ yuktam iti cintā kriyate, tathā bhagavato 'pi jñānenārthasya grahaṇaṃ prati kiṃ na kriyate.
  - 6) TS 2046: sākāraṃ tan nirākāraṃ yuktaṃ nānyasya vedakam/ iti buddhe 'pi vijñāne na tu cintā pravarttate//
  - 7) TSP 699.8-9: na hi bhagavato jñānaṃ tasya grāhakam iṣyate, yenātrāpi cintā kriyate; yāvatā tasya sarvāvaraṇavigamān na grāhyagrāhakavikalpo 'stītiṣṭam.
  - 8) TSP 699.10-11: nanu ca yady api bāhyo 'rtho nāsti grāhyaḥ, tathāpi cittāntaram asty eva santānāntaravartti, tad bhagavajjñānasya kimiti grāhyam na bhavet.
  - 9) aupalambhikadarśane という語は、「世尊の智」(darśana) が認識 (upalambha) を本質とすると認められる時」とも解釈されるとカマラシーラは注釈する。TSP 699.15-16: 15-16: yad vā, aupalambhike bhagavato darśane jñāne 'bhyupagamyamāne sati...
  - 10) TS 2047: anyarāgādīsaṃvittau tatsārūpyasamudbhāvāt/ prāpnoty āvṛtisadbhāva aupalambhikadarśane//
  - 11) 所取, 能取と考えて良いであろう。
  - 12) TSP 699.12-18: anyasantānavartti rāgādīsaṃvedanaṃ hi yadi, paraṃ sārūpyād eva yuktam, nānyathā; atiprasaṅgāt/ tataś ca yadi sarvātmanā sārūpyam, tadā bhagavato 'pi jñānaṃ raktaṃ syāt/ evaṃ sati kleśāvaraṇaṃ aprahīṇaṃ syād ity āvṛtisadbhāvaḥ prāpnoti/...athaikadeśena sārūpyam, dvyākāraśyāprahīṇatvāj jñeyāvaraṇasadbhāvaḥ prāpnoti; grāhyākāraḥkalāṅkitatvāt.
  - 13) TSP 700.3: yadi na kiñcij jānāti, kathaṃ tarhi sarvajñāḥ syāt.
  - 14) TS 2048-2049: kalpapādapavat sarvasaṅkalpapavanair muniḥ/ akampyo\* 'pi karoty eva lokānām arthasampadam// tenādarśanam apy āhuḥ \*\*sarve sarvavidyaṃ\*\* jinam/ anābhogena niḥśeṣasarvavitkāryasambhāvāt// \*BBS akampye, GOS akampo, Tib. P 90a3-4: ma bskyod kyañ. \*\*BBS sarvaṃ sarvam idaṃ, Tib. P 90a4: rgyal ba thams cad mkhyen pa ni// des na gzigs pa med par bstan//
  - 15) BASK 86e: rtogs med ji ltar thams cad mkhyen//
  - 16) BASK 86abcd: thams cad mkhyen pa'i ye śes kyi// myoñ bar bya ba brgyud gžan la// bsgos pa'i chos rnam gañ dag yin// de dag gis kyañ ma ñes te//
  - 17) TSP 692.18-21: yathā kila buddhasya bhagavato yad vijñeyaṃ santānāntaracittam, tasya buddhajñānasya ca sahopalambhaniyamāno 'pi asty eva ca nānātvam ...ity ato 'naikāntiko hetuḥ.
  - 18) TSP 693.6-8: na ca buddhasya bhagavataś cittena parasantānavarttinaś cit-takṣaṇā avasiyate; tasya bhagavataḥ sarvāvaraṇavigamena grāhyagrāhakakalāṅkarahitatvāt.

*Tattvasaṃgraha*, Bahirarthaparikṣā にあられる形象虚偽論について (栗原) (197)

- 19) SST 72.7-10:..saṅs rgyas kyi yul ni bsaṃ gyis mi khyab ste/ de dag gi ni gzaṅ gyi sems mkhyen pa bsaṃ gyis mi khyab pa 'ba' žig tu ma zad kyi/ khyad par med par don thams cad rnam pa thams cad du mkhyen pa yaṅ bsaṃ gyis mi khyab bo//
- 20) 例えば、我々には細かすぎて見えない原子、さえぎられていて見えない壁の向こう側、時間的に隔てられていて見えない未来など、人間の認識の限度を超えているものも、一切智者は認識するという意味であろう。
- 21) SST 73.4-8: so sor rtog pa'i ye śes 'jig rten las 'das pa'i ye śes kyi rjes las thob pa gzuṅ ba daṅ 'dzin pa'i rnam par rtog pa daṅ ldan pas/ dños po phra ba daṅ sgribs pa daṅ bskal pa thams cad rnam pa thams cad du mkhyen pa pa ni 'jig rten pa'i rnam pa thams cad mkhyen pa yin te/
- 22) ĀM 109: vijñaptir api vijñapter anartha na yadīṣyate/tadānīm tatsamādhānaṃ nanv eti sthūlatāpadam//
- 23) ĀMṬ D 83b6-7=P386a2-3: 'di ltar gzugs la sogs pa rnam phyi rol du gyur pa bkag nas rnam par rig pa gzaṅ yaṅ yul gi dños po yin pa dgag pa'i phyir/ rnam par rig pa'aṅ rnam rig gi\*// žes bya ba la sogs pa smos te/ rnam par rig pa'aṅ rnam par rig pa gzaṅ gyi don min te yul min no// \*D gis.
- 24) Kurihara S., "The Classification of Kambala's School", 『印度学仏教学研究』 39-2, 1991, pp.1013-1006.
- 25) 森山清徹, 「後期中観派と形象真実論・虚偽論—Śākyabuddhi, Prajñākaragupta, Kambala—」, 『印仏研』 41-1, 1992, pp.439-433 及び白岩顕成, 「唯識五論について」 『印仏研』 41-1, 1992, pp.432-429.
- 26) 渡辺重朗, 「Śubhagupta's Sarvajñasiddhikārikā」, 『成田山仏教研究所紀要』 10, 1986, pp.55-74.
- 27) 川崎信定, 『一切智思想の研究』, 東京, 1992.
- 28) Kajiyama Y., "Buddhist Solipsism—A free translation of Ratnakīrti's Saṃtānāntaradūṣaṇa", 『印仏研』 13-1, 1965.
- 29) 若原雄昭, 「アーガマの価値と全知者の存在証明」, 『仏教学研究』 41, 1985, pp.52-78.

〈キーワード〉 sarvajña, cittāntara, Vinītadeva, Śāntarakṣita

(京都大学助手)